

中国訪問旅行の思い出

庄司 キン子

待ちに待った中国旅行の日がきた。私はこの日の来るのを何年待ったことか……。まずこの旅行に際して快く送り出してくれた家族に感謝し、また、石田さんはじめ訪中団の方々にも心から感謝しています。日がたつにつれ当地のことは忘れざらぬですが、写真を見たり日記を読んだりして思い出しています。

私も一つの希望を胸に抱き、最上郷開拓団にいる叔父をたより、昭和二十年三月に十六歳で叔母（当時内地帰国中）と一緒に渡満。八月に終戦、現地で越冬、五月に最上郷引揚、山形の故郷に着いたのは七月でした。十六歳という年齢で一人渡満を許した母を思うと胸が痛みます。二度と繰り返したくない体験ではあるが、激動の五十年を歩み続けたのもあの苦勞は無駄ではなかったと思っています。

北京の空港に着いた時、中国の青年達が六八洲訪中団歓迎と書いた旗を持って迎えてくれたのがとても印象的でした。何の拘りもなく迎えに来てくれた自動車に、ニイハオ・ニイハオの言葉で荷物を運んでくれた中国の青年達には頭の下が

る思いでした。日本語の上手な李さん、歌の上手な用さん、今も一生懸命頑張っていることでしょう。

たまにテレビで見る天安門、故宮、そして宇宙より見えるたった一つの建造物・万里の長城、中国四千年の歴史を誇る一つ一つの建物に目を見張る感動の一日でした。

そしてハルピンに着いた。ここでも感じのいい中国の青年達に迎えられ、松花江、太陽島、博物館と案内され楽しい旅でした。

バタヤ街観光、道路の両側にずらりと並ぶ屋台店、私達を見て甲高い声でよんでいる。中国の添乗員さんは見た目より味がいいようですかとすすめる。ふと思いついた。アンズの花がきれいに咲いていた頃だったと思います。友達にさそわれた娘々祭に行き、ロクトウメンを御馳走になった時のおいしかったこと。大きなドンブリ一杯たいらげて笑われたっけ。

“どんなにして料理するの”と見に行ったら、なんとびっくり、大きな釜に豚の頭そのまま、鼻を上にもかけてロクトウメ

ンと一緒にぐつぐつ煮られていた。やっぱり添乗員さんの言うとおりに目より味だった。

ハルピンより佳木斯まで私達は寝台車でしたが、中国人の甲高い声に寝付かれず下を見たら、李さんが荷物の監視でした。眠れぬまま思い出すことは避難する時のこと。無蓋車に乗せられ雨に降られてずぶぬれになり、誰一人声も出さず、幼な子を抱いた母親は自分の体で雨よけする、なんとも言えない悲惨な光景でした。

どこの駅だったか記憶にないが突然列車が止まった。そのうち北へ向かう列車がやってきた。私達と同じ無蓋車だった。日本の兵隊ではない。私達を見て哀れと思ったのか、その中の一人が飯盒を持って私に受け取れと言葉をかけた。どうしよう、頂戴しようと思おうと思った時、前の方から手を出したら連れて行かれるぞと怒られた。何分位停車したか、兵隊達の列車が先に動き出したと同時に飯盒を投げてよこした。それを私が受け取ってありがとうと頭を下げたら、手を振っていた。日本人ではなかったと思う。

開けてみたら真っ白な外米がぎっしり入っていた。当時私は叔父の子供で四歳になる男の子を抱いていた。御飯を見て喜ぶ子供の顔、自分一人で食べたかったので、子供達に分け与えるのを目を皿にして見ていた顔、今でもあの時の顔が目に残ります。

季節も良いせいとお天気に恵まれ、誰一人病気もせず何よりでした。運悪く日本に帰れず中国に眠る方々がきつと見守って下さったと思います。

表敬訪問も終わり、いよいよ大八洲開拓団入植地に入る。山のあるのに驚いた。開拓地とは広々として地平線より日が昇り、地平線に日が沈むものと想像していました。

戦後植えられた道路の両側の木、田中一郎さん、姉さん（きい）達がこの道を学校に通ったとのこと、さぞ万感の思いだったでしょう。この北の果てより血を吐くような苦勞を乗り越え帰国の道を辿ったことは体験のない人には想像もつかないでしょう。

佐藤組合長さんの組の新京越冬の地に立ち寄り、当時を偲び、ここに眠る方々に心から冥福を祈る。

新京では女の添乗員さんがとても優しくきれいな方でした。街も変わりつつあるが、戦前の建物がまだ沢山あるとのこと。関東軍司令部もそのまま。そして、波乱万丈の人生をおくったと言っても過言ではないと思う溥儀皇帝（ラストエンペラー）の第四婦人とも会い感動しました。

いよいよ最上郷に近くなり胸のたかまりを感じる。

列車の遅れで昌図駅には停車時間があまりないとのこと。置き去りにされてはと石田さんと伊藤さんに昌図駅で写真を撮ってもらいましたが、一緒に降りて撮っておけばよかった

と悔しく思っています。昌図駅は建て替えられていた。

母国日本への帰国に際して、最大の犠牲者となった最上在満国民学校校長早坂徹治先生がこの地に眠っている。感涙にむせぶ。線香の一本も上げられないことを詫びながら、車窓よりはるか最上郷方向を望み、走馬燈のようにかけめぐる当時はを偲び、改めて合掌し冥福を祈る。

藩陽引揚げ越冬地に向かう途中ものすごい大風雨、どんな思いでここに眠っているのか……。中国の添乗員さんが「日本の方が来ると必ず雨が降りますよ、きっと皆さんと会えて喜んで、うれし涙でしょう」と感慨深く話してくれた。雨のため下車できず、車中にて冥福を祈る。

大連に向かう高速道路で馬車が横切る大胆不敵な行動、日本では想像もつかない光景である。中国の旅も終りに近づいた。大連の夜はなかなか寝付かれなかった。最初から最後まで

訪 中 追 憶

佳木斯から樺南に向かって走るバスは、前回と同じコースで、道路両側のポプラ並木は地平線の彼方まで続く。

濃い緑の葉先は、降るような太陽光線を樹林一杯にうけて、時折まぶしく照りかえす。

樺南県人民政府の表敬訪問を終り、湖南宮街を見学後昼食

でお世話して下さった李さん、各場所で行動を共にしてくれた中国の青年達に感謝しながら眠りにつく。大連の街も、日本人の住んでいた家も多く見られたが、近代的な高層ビルも建ち並ぶ都会で、なんとなく中国という感覚がないような気がしました。もう一度行ってみたい。

避難の体験の苦しみは文章には表し得ない、忘れ去りたい悪夢もあるでしょうが、心暖まる楽しみの一つや二つ、お互いの胸に秘めてもありません。私も敗戦のため希望も叶えられず引揚げてきました。あの体験があったからこそ現在があると思っています。中国の旅も、私には本当にすべてが感動の毎日でした。これからはだんだんと老いに向かっているかねばなりません。その老いに惑わされず生甲斐を求め、穏やかな余生を送りたいと思っています。

佐 藤 斎

を終えてから職員案内で一路東柳毛河へ。昔、水田用水の揚水機を取付けたあのあたりか。大八虎力河のほとり、その一角に「大八洲開拓殉難者之霊位」を供えて、今回同行された福井の石田民栄さん、米沢の須藤正さん、石田団長のお経の唱和を頂き、心ゆくまでご供養が出来ましたこと、六十三